乱歩おじさん

江戸川乱歩論

松村喜雄

晶文社

著者について

松村喜雄（まつむら・よしお）

一九一八年東京に生まれる。東京外語仏語科卒業。外務省勤務をへて、推理小説研究家、作家。一九九二年逝去。著書『怪盗対名探偵』（晶文社、第三九回日本推理作家協会賞評論部門受賞）ほか。訳書　ボアロー、ナルスジャック『大密室』（晶文社）ほか。

乱歩（らんぽ）おじさん

江戸川乱歩論

一九九二年九月三〇日発行

著者　松村喜雄

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二－一－一二

電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六－六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1992 Tami MATSUMURA

Printed in Japan

Ⓡ本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三二六九―五七八四）までご連絡ください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

乱歩おじさん

江戸川乱歩論

松村喜雄

晶文社

ブックデザイン　日下潤一

写植印字（カバー・扉・帯）　前田成明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

乱歩おじさん　目次

乱歩と私——まえがきにかえて　11

第一章　新進探偵作家乱歩——21

第二章　長編作家としての乱歩——63

第三章　放浪生活の後で——94

第四章　「虚名、愈々（いよいよ）高く……」——105

第五章　戦後の乱歩——172

第六章　怪人二十面相対明智小五郎――194
第七章　トリックの狩人――220
第八章　代作問題について――234
あとがき　246
江戸川乱歩作品目録　250
松村喜雄さんのこと　山前譲　261

編集協力　山前譲

むろんです。驚愕と、恐怖と、歓喜です。
この世のほかのものです。想像を絶したものです。

江戸川乱歩『影男』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

江戸川乱歩の人と作品を
もっとも理解した、
中島河太郎氏に捧ぐ

乱歩と私——まえがきにかえて

私が江戸川乱歩論を書こうと思いついたのは、昭和十年頃だった。

私はまだ十代だったし、それは無謀きわまる夢だった。文章もまだ一人前に書けなかったけれども、怖いもの知らずの少年のこと、意欲だけはさかんだった。むろん、それは実現しなかったが、その気持ちだけはずっと持ち続け、目に触れるかぎり、乱歩論は必ず読むようにしていた。

その頃、叔父の書棚にあった平凡社版の金色の乱歩全集十三巻を片っ端から読破していた。時間はたっぷりあった。家で学校の勉強などしたことはなかった。

いま考えてみると、文字を読む習慣が身についたのは『少年倶楽部』『少年世界』『譚海』などの雑誌からであった。文字を読むか活動写真を見るか、時間を消費する手段はそれくらいしかなく、小学上級生の頃に『大菩薩峠』や『南総里見八犬伝』を全巻読んだ記憶がある。「大

衆文学全集」「吉川英治全集」「ルパン全集」なども読んでいた。これらの本は家にあった。私の父は酒びたりで本など読むような人ではなかったので、母が買って読んでいたのだろう。

小学生の頃の思い出など何もないが、読んだ本と活動写真のことだけは、奇妙に鮮やかに憶えている。ということは、私はこの二つだけに影響を受け、教えられて、大人になったにちがいない。

最近、NHKの衛星放送で、伊藤大輔監督の『治郎吉格子』を見た。昭和六年に作られた映画で、私は封切りの時に見た記憶がある。この作品では、登場人物のすべてが相互に関係しながら、一篇の物語が進行していく。歌舞伎の因果応報ものや宝物争奪戦ものの影響が筋立てに残っている。いま考えれば、当時の長編探偵小説や通俗活劇小説にも、この要素が色濃く反映していた。複雑にからみあった人間関係の中に真犯人が隠されているのである。これは、本格探偵小説の骨法と相通じるところがある。こんなところから、知らず知らず、私は探偵小説の基本に馴染んでいたのだろう。

小学校を卒業した後、私の一生を左右することになる二人の年長の友人と出会う。花崎清太郎と石川一郎の両氏である。

二人とも凄まじい読書力の持ち主だった。怠惰な私は、この両氏に引きずられ、本の世界に引きこまれ、その魔力のとりこになった。

現在の社会通念では信じられないことかもしれないが、私たち三人に共通した点は、学校教

育を信じていなかったことだ。与えられたものを読むのではなく、自分の読みたいものを読む。その姿勢を貫いた。その姿勢が私の頭に焼きついてしまったのか、いまでも、学歴が話題になったりすると、途端に気分が悪くなる。

当たり前のことだが、人間の価値は学歴によって決まるのではない。それは、その人が一生をかけて追求してきた思想や識見によるのである。そういう人こそ、自立した個人であって、近代社会はそういう個人によって構成されるべきなのだ。ここでわざわざこういうことを言うのは、私は偶然にも国家公務員という職業を選んでしまったため、現実の社会が私の考えと違っているのをイヤというほど思い知らされることになったからである。

乱歩は自由人であった。いささかもそうしたことは口にしなかったが。われわれ十代の少年にたいして、二十歳も年長の乱歩が対等に話しをし、われわれの話しにも耳を傾けてくれた。その人間性をわれわれは心底から信頼した。

乱歩は自分の道をひた走りに走った。夢を原稿用紙に書き続けた。そのあやかしの世界の根底には、十九世紀的な個人主義を根底とするモラリストの眼があった。

乱歩のわれわれにたいする語り口は、読みたくてたまらないから本を読み、その喜びを話したくてたまらないから話す、といった印象だった。話しはきちんと整理され、相手を納得させる。冷静な話しぶりなのだ。こうした乱歩をある人は学者みたいだと言うかもしれない。しかし、問題は執拗な追求心だけではない。そのことに愛情をもち、楽しんでいることだ。聞くも

のは、その愛情に打たれ、引きこまれ、恍惚と聞き惚れてしまう。そうした包容力が乱歩にはあった。

乱歩の読書力は旺盛だった。モンテーニュやラ・ロシュフーコーなど、フランスのモラリストの著作に親しみ、フランス心理小説、日本の仏典、ドストエフスキー、そして、何より筆名の由来ともなったエドガー・アラン・ポーに心酔した。そうした教養が、初期の短編に色濃く反映している。だが、そういうことが理解できるようになったのは、ずっと後のことである。

通俗長編しか読んでいなかった少年の私に、乱歩が怒った顔で、春陽堂版「探偵小説全集」のうちの江戸川乱歩集をつきつけ、これを読めと言ったのは、よほどの自信があったからだろう。水色の小型本の記憶が、それから五十年たったいまでも、はっきりとある。私が日本の探偵小説に心底脱帽したのは、その本が最初である。

ここで私の立場を明らかにするためにも、乱歩と私との個人的な関係に触れておくほうがよいだろう。それは同時に、乱歩を生んだ家系の特質をも説明することになるだろう。

乱歩の母と私の祖母が姉妹だから、乱歩と私の母とは従兄弟ということになる。

講談社版「江戸川乱歩推理文庫」の第五十三巻『探偵小説四十年1』の巻頭に、明治四十一年末、家族といっしょに撮影した写真が掲載されている。その中で、岩田静（乱歩の叔母）とあるのが、私の祖母である。私はこの祖母に初孫として可愛がられた。戦時中に亡くなるまで、私は母よりもこの祖母との関係が深かった。

平井家（乱歩の本名は平井太郎）も岩田家も三重県津市の出身で、両家とも早くから東京に出てきた。似たような境遇のせいか、乱歩の母と私の祖母は仲が良かった。誘いあわせて浅草の観音様に参詣することなどもあったようで、そうした折り、やはり平井家の初孫である乱歩の長男の隆太郎氏と私が連れだされた。

私の叔父（乱歩の従兄弟）の岩田豊樹が生前書き残した「父母供養記念」という小冊子が残っている。それに私の祖父岩田豊麿についての記述がある。豊麿は日本画家であった。土佐絵の伝統を守り、日本美術協会、国風会、革丙会などの役員を兼ね、世渡りが下手で生活が楽ではなく、祖母は姉きく（乱歩の母）と質屋通いをしていた。「其後文展、帝展に入選してから暮らしは楽になり」とある。

その家に乱歩一家も同居していた。乱歩の自ら作成した『貼雑年譜』に、「大正五年一月、牛込区（現在、新宿区）新小川町三ノ十九ノ広キ家ヲ借リ、岩田叔父一家ト平井一家ト同居生活ヲハジム」とあるのがそれである。

『貼雑年譜』にその家の見取り図が載っている。岩田家の家族の中で「よし」とあるのが私の母である。乱歩の妹玉子がこの家で出生とあるが、私もここで生まれた。私の家庭内に複雑な事情があって、私はこの祖父の家で生まれ、そのままこの家に引きとられた。

母屋とは別に立派な台所が別棟になっていて、庭には池と小山があった。池の表面は青い苔におおわれ、不気味なくらいだった。バンという鳥が飼われていた。先日、隆太郎氏と話して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com